

アジア文化交流研究 第 5 号 (2010年) 抜刷

異文化受容における漢字の射程

——日本の蘭学者と来華宣教師の場合

Translating Western Concepts by Creating New Characters:

A Comparison of Japanese and Chinese Attempts

異文化受容における漢字の射程

— 日本の蘭学者と来華宣教師の場合

沈 国 威

Translating Western Concepts by Creating New Characters:

A Comparison of Japanese and Chinese Attempts

SHEN Guowei

Chinese characters are considered as an adaptable system, open to expansion and revision. Throughout history, the creation of new characters was one of the most important solutions to enlargements of the conceptual repertoire. Both scholars of “Dutch Learning” in Japan and missionaries active in nineteenth-century China used Chinese characters in their translations of western concepts. From a methodological point of view, Japanese scholars mostly coined compound words rendering the literal meanings of their terms of departure while translators in China, invigorated by the success of the new characters devised for chemical elements, believed that drafting new characters was more in line with the characteristics of the Chinese language. However, notwithstanding the painstaking efforts with which they were created, the new characters proposed by missionaries were eventually replaced by compound terms first used in Japanese adaptations. This paper examines the different practices and attitudes of Chinese and Japanese authors toward the creation of new characters as a method of translation. Analyzing the influence of their divergent approaches on the lexical systems of their respective languages, since Chinese has a very limited number of phonetic patterns, I conclude that it is impossible to create viable technical terminologies exclusively by increasing new characters.

キーワード：翻訳、学術用語、漢字、宣教師、ロブシャイト、フライヤー

デオロギーを獲得したのである。この意味において、近代以降の東アジアにおける各言語の変化は、その重要性においては歴史上如何なる時期よりも上回っていると言える。さらには東アジア言語の近代的变化はそれぞれの言語の自立的発展というより、いわゆる「西学東漸」という西洋からの新知識の流入に触発された側面が大きい。従って言語の変化過程を記述する際、東西、及び東アジア地域内における言語接触と相互の影響作用は重要な切り口となる。

表意文字（または音節文字、形態素文字とも呼ばれる）である漢字には、ヨーロッパやアジアのその他の古典言語（ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語、アラビア語など）に備わっている宗教的神聖性がない。しかしそれは、漢字が言語を超えた表記システムとなることを妨げなかった。漢字は東アジア各国に、古典と言語の記録手段を提供し、漢字文化圏と呼ばれる文化共同体を形成させた。漢字文化圏にとって、漢字の存在は書面語による表現を可能にしたが、同時に、漢籍の規範性によって言語使用者の表現の自由が著しく束縛される結果をもたらした。このため、漢字文化圏内の各言語は「国語」として成立する場合、脱漢文の過程を経なければならない。しかし漢字は、様々な議論が交わされ、多くの改革が実施されたにもかかわらず、その地位が揺らぐことはなかった⁴⁾。そればかりか、漢字文化圏では、正に漢字によってこそ西洋近代の新知識の受容を実現したのである。現在すでに漢字を使用していない国の「国語」においても、「漢字語」ならず「漢音語」が書き言葉の主要部分を占めているのである⁵⁾。

近代以前、漢文は漢字文化圏において文章語の共通語 (lingua franca) としての役割を果たしてきた⁶⁾。それに比べれば、日本語は商業活動や古典の伝承、新知識の受容などあらゆる分野において重要な言語とは言えなかった。しかし、明治維新以後、日本語は他に先駆けて近代的国語へと変身を遂げ、新知識

1) 劉進才『語言運動与中国現代文学』、中華書局、2007年、13~14頁。

2) いわゆる「出版言語」とは、印刷技術がもたらしたテキストの流通と書記言語の二つが相互に補完しあった問題である。

3) 「欧州を例にとれば、俗語が文字と文法を備え始め、これによって文学作品を記録するという可能性を得て、国民文学の形成にともなって最終的に「国語」の地位を獲得する、このプロセスとそれに伴う諸現象が「言語の近代化」過程と呼ばれる」。山本真弓『言語的近代を超えて』、東京、明石書店、2004年、10頁。

4) 漢字と漢字によって記録された典籍との間に切り離すことのできない共存関係は存在しないと言える。

5) 例えばベトナム、北朝鮮は漢字を使用していないが、日本語の字音語に当たる語彙が数多く存在している。

6) 漢文が完全に「共通語」の地位を失ったのは、20世紀に入ってからである。

を伝える媒体という地位を獲得した。漢字文化圏の他の国と地域は、日本語によって短期間で西洋の新しい知識を受け入れることが可能であることに気づき、日本語は歴史上初めて、非母語話者の学習対象となり、漢文に取って替わって、一地域の「方言」から東アジアの優勢言語へと成り上がったのである。日本語の変化は、江戸時代以来、西洋の新知識を受け入れてきた結果であり、その過程で漢字による新語・訳語が決定的な役割を果たした。

我々の言語が外来の新概念を受け入れるには、大きく二つの方法がある。「訳」（翻訳）と「借」（借用）である⁷⁾。「訳」とは、即ち自言語の言語成分を用いて、ソース言語の概念を自言語に移入させる作業である。具体的な方法としては、(一) 既存の語を用いて翻訳すること。(二) 新たに語を作り翻訳することの二つに分けられる。また、新たに作られた訳語が複合語であれば、さらに直訳、意識、混合訳の別があり⁸⁾、単純語であれば、漢字を作り、訳語とする方法がある⁹⁾。これは、漢字の構成部品（偏旁部首）を利用して新たな文字を生み出すことで、漢字を用いる言語にのみ存在する方法である。漢字は、絶えず増殖し続けることが可能な開かれた文字体系と見なされており、歴史的に見ても新たに漢字を創出することは概念の増加に対処する最も重要な方法の一つであった。これが、造字による訳語創出の言語心理学的、及び文字学的な基盤となっている。近代以降、日本の蘭学者と来華した宣教師はいずれも、漢字を用いて西洋の新概念を翻訳した。その際、「字」から「語」へ、という過程を経なければならない。どちらも非母語話者であるが、訳語創出の方法にどんな違いがあったのだろうか？ 蘭学者は、中国の古典語を用いて外国語を訳出する方法こそ正統なものとして信じており、由緒正しい語、つまり出典のある語を使わなければならないとし、どうしても中国の古典から語句が見つからない場合には、逐字訳による複合語の考案が行われた。造字はまさに驚天動地の一大事で、勝手に行ってはならないと考えていた。一方、来華した宣教師は、新たに漢字を作り訳語とすることに熱心であった。本論文は、訳語創造における両者の相異とその結果を分析することによって、異文化受容における漢字の射程を考察するものである¹⁰⁾。

7) 「訳」と「借」の最上の相異は、「訳」によって得られた語には積極的な対訳や造語の過程があり、語の成立と概念の

る)

つまり音訳語「機里爾」を採用した理由は「無語可當。無義可解」ということである。「無語可當」とは、伝統的中国医学にはこの概念がないため、それを表す語がないということである。一方、「無義可解」の「義」は、二通りの解釈ができよう。一つは語源的意味、つまり語が成立した理由で、もう一つは概念的意味、つまり「機里爾」が指し示す器官とその器官の官能といった辞書的な意味である。概念的意味のない語は存在しないが、すべての語が語源的意味を持っているわけではない（言語形式と内容の関係は恣意的であるという現代言語学の原則に従えば、オノマトペ以外の単純語は語源的意味を持たない）。オランダ語と解剖学に関する知識が不足しているため、『解体新書』の翻訳者は、「機里爾」の二種類の「義」についてどちらも不明な点があったようである。確信が持てない時、無理に訳語を作るのではなく、外国語の音形をそのまま取り入れるということは、翻訳者の科学的な態度の表れである。同時に「直譯（即ち音訳）」は、やむを得ない時の便宜的な方法であることも表している。ところが時代が下り、『重訂解体新書』（大槻玄沢著、1798年完成、1826年刊、以下『重訂』）の「旧刻凡例」に至っては、同じく腺の音訳語を例として示してはいるが、音訳語を採用する理由は「無名可充。義可取」に変わった。ここでの「義」は概念的意味としか考えられない。つまり、時間の経過に従い、蘭学者は腺の概念的意味を正確に把握できたが、未だ適切な訳語を見つけ出せずにいるということになる¹²⁾。一方、『重訂』の本文において大槻玄沢は「濾胞」という意識語を初めて使用した。その造語の理由について次のように説明している¹³⁾。

吉離蘆之名。特命此物。別無它義。漢固所未説。以故宜音譯以存原称。然有嫌此物独存原名。異于他物。因以其官能作用。宛如用篩羅濾過水漿者。義譯曰濾胞耳。竊顧未必切當。姑期他日之再考云。(後略)

11) 杉田玄白『解体新書』、1874年、卷頭凡例、五オ。

12) 外來の概念が自言語に存在せず、また語源的意味も不明な場合、訳語の創出が非常に困難であることを、われわれは経験上知っている。

13) 大槻玄沢『重訂解体新書』、1826年、卷五、名義解、二四ウ。

異文化受容における漢字の射程（沈）

（吉離蘆という名称はこの器官の名前で、特に意味はない。中国医学にないものであるため音訳の形で原語の名称を残すほうが適当であるが、この器官だけ原語の名称を残すと、他と異なる嫌いがある。この器官は、篩のように水などを濾過する機能があるので、濾胞と意識する。必ずしも適切ではなく、他日の再考を期す）

つまり、「吉離蘆」という語は人体の器官名として、語源的な意味はない。中国医学にはこの概念がないため、「原称」を残す音訳形式を用いることにより、他の概念の混入を防ぐほうが適当ではあるが、翻訳書全体の体裁に合わない嫌いがある。よって生理上の機能等に基づいて新しい訳語を考案した。但し「竊顧未必切當。姑期他日之再考云」という表現から、大槻が自分の作った訳語に満足していなかったことが窺える。これは謙遜だけではないであろう。というのは、大槻は同書の中でまた「膈」というすでに廃れた字を用いて、腺の概念を訳出しようと試みたからである。この文字の元の意味は「肉塊」、即ち「謂肘膝後肉如塊者（肘膝後の肉の塊）」である。大槻がこの字を選んだ理由は、肉を表す肉月偏に「困」（菌の異体字）という文字の構造上にある。「菌」は集まる意味があり、細胞の組織が集まってできた器官という意味を大槻は利用しようとしたのである。しかし既存の字に新しい意味を与えることは他でもなく同形異義語を作り出すことである。「同形衝突」を避けるためか、大槻は最終的に「膈」を放棄した。しかし大槻の強い探求心に刺激され、周囲の人々は引き続き適切な訳語を求めようとしたのであった。1805年に刊行された『和蘭内景医範提綱』（宇田川玄真著、以下『医範提綱』と略す）において、「腺」が「腺新制字、音泉」という説明付きで初めて登場したのである。造語者は不明であるが（必ずしも宇田川玄真ではないであろう）、体液が泉のように湧き出るという意図が明らかである。この字は、会意的な要素が非常に強い文字である¹⁴⁾。『医範提綱』以降、「腺」は徐々に受け入れられるようになる。

大槻玄沢は訳語の創出について「今所伝譯。務欲名義之妥當於原称。不能以不私造語新製字以譯定¹⁵⁾。所謂朧。腔。撮護。或解体。神經。濾胞之類皆是也（翻訳する際、訳語を原語に正確に対応させるように務めている。そのため勝手に造語をし、また新しく字を作らざるを得ない。いわゆる朧、腔、撮護、解体、神經、濾胞などは皆そうである）」と述べている。注意すべきは、大槻にとって「私造語」と「新製字」を同レベルの行為として捉えていることである。例として挙げられているものの中では「朧、腔」が「新製字」で、その他は「私造語」ということになる¹⁶⁾。いわゆる「造語」とは、新たな複合語を考案することと理解すべきである。蘭学の翻訳において最もオーソドックスな方法は「翻訳」、つまり中国の

降に作られたものである。方法としては主に会意で、「峠、辻、躰、鯛」などが好例である。国字は、ほとんど字音、つまり中国式の発音を持っていない。明治以降、さらに「𪛗 (キログラム)、糒 (センチメートル)、𪛘 (キロメートル)」などの合体文字も考案されたが、いずれも単音節ではなく、記号として見るべきであろう。国字は低俗なものと考えられ、正統な漢学教育を受けた者からは軽蔑された。例えば「腺」の概念について、稲村三伯の『八譜』、野呂天然の『生象止観』などは、奇字を作って訳語としようとしたが、結局、成功しなかった。石坂宗珪は、造字は「古聖」の成案をひるがえし、「腺」などという字をでっちあげるのは、人々を欺くことだとして批判している¹⁷⁾。

三、造字による訳語創出の提案者——ロブシャイト

中国で最初に、新しい漢字を作って訳語とすることを試みたのはドイツ人宣教師ロブシャイト (W. Lobscheid, 1822~1893、中国名: 羅存徳) であった¹⁸⁾。ロブシャイトは、19世紀以降の中国及び日本における漢字語の形成に最も影響を及ぼした人であると同時に、また不明な点が多い人物でもある。氏は『英華字典』(1866~1869) で名前を知られ、中国語そのものに対する研究も当時の最高レベルであった¹⁹⁾。19世紀に中国で出版された数多くの英華辞典の中で、『英華字典』は特筆すべき存在であった。しかしロブシャイトは教義をめぐる教会と論争を起こしたため、19世紀に西洋人が編纂した最高傑作とも言うべきこの辞書の中国国内での発行が妨害された²⁰⁾。現在、中国国内でロブシャイトの『英華字典』(著作を含む)を見つけることは非常に困難で、そのほとんどが日本に購入され²¹⁾、近代日本の英和辞典の編

17) 笹原宏之『日本の漢字』、東京: 岩波書店、2006年、177~184頁。

18) 漢字に口偏を加えて外国の人名、地名などの固有名詞に当てた例は古くからあったが、ここでは論じない。

19) 沈国威『近代日中語彙交流史』、東京: 笠間書院、1994年、136~139頁。

20) 那須雅之氏「W. Lobscheid 小伝——『英華字典』無序本とは何か」(『愛知大学文学論叢』109輯、1997年、左1~20頁。「Lobscheidの『英華字典』について——書誌学的研究(1)」(『愛知大学文学論叢』114輯、1998年、左1~26頁。「Lobscheidの『英華字典』について——書誌学的研究(2)」(『愛知大学文学論叢』116輯、1998年、左1~25ページ)、『英華字典』を編んだ宣教師ロブシャイト略伝(上中下)」(『しにか』Vol.9~10、96~101ページ、Vol.11、100~105頁、Vol.12、106~110頁)。

21) 宮田和子氏の調査によれば、日本では公共図書館だけでも30ヵ所以上が、70セット余りもの『英華字典』を所蔵して

纂、訳語の形成に多大な影響を与えた。

『英華字典』の巻頭に、「張玉堂」と署名された中国語の序文がある。張氏は序文の中で、ロブシャイトに最大級の賛辞を送った。

其中俚語文言無不悉載、前人所略者譯之不厭其煩、所贅者刪之不嫌其簡、訪諮至于邇言、搜羅不遺俗字、重抽旧緒、別出新詮、博采傍稽、合參互証

（俚語も文語もことごとく記載され、以前の辞書で省かれたものも労をいとわず訳し、無駄な部分は惜しまず削ってある。日常の言葉を調べ、俗語ももらさず、古い意味を復活させ、また新しい意味を与え、広く用例を収集し、相互に参照して意味解釈を行っている）

ロブシャイトの前に、中国ではすでにモリソンの『字典』（1815～1823、主に中国語文を学ぶ外国人向け）、ウィリアムズの『英華韻府歷階』（1842）及びメドハーストの英漢字典（1842～1843）、漢英字典（1847～1848）が出版されていた。序文にある「前人所略者……」云々がこれらの辞書を指しているかどうかは不明であるが、俗語、俗字に関する評価は『英華字典』の実際の状況に合致しており、特に「重抽旧緒、別出新詮」は、ロブシャイトの訳語創出に対する最も適切な評価である²²⁾。つまりロブシャイトは『英華字典』を編纂する際、新しく訳語を作り出すより、既存語にある古い意味を掘り起こしたり（重抽旧緒）、或いは既存語に新しい意味を与えたり（別出新詮）する方法を、主に用いていたのである。『英華字典』において、西洋の概念の取り入れはまだ、既存の語に新しい意味を与えることによって賄える範囲内であったということである。しかし、ロブシャイトがすでに、新たな問題に直面していたことも明らかである。例えば、ロ氏は『英華字典』のPart IVの序文（1869）において、化学元素の命名問題について論じている。ロブシャイトは、中国語で世界を構成する基本要素を表す文字は「行」だと考えていた。従って、ほとんどの化学元素の名称は「行」の中にある漢字を差し込む方法で簡単に作り出すことができると思っていた。つまり「行」を左右に分割し、間に化学元素に関係する漢字を挟み込むのである²³⁾。ロブシャイトは序文で以下の例を挙げている。

術 (Shwui) = hydrogen (水素)

術 (Tan) = carbon (炭素)

術 (Kwang) = phosphorus (燐)

術 (Luh) = chlor (塩素)

Oxygen	衡 Yang (酸素)
Potassium (Kalium)	衡 Kien (カリウム)
Selenium	衡 Hung (セレン)
Silicon	衡 Shih (シリコン)
Sodium (Natrium)	衡 so (ナトリウム)

Uranium	銜 Tien (ウラン)
Vanadium	衡 Hau (バナジウム)
Yttrium	衡 Kin (イットリウム)
Zirconium	衡 Heh (ジルコニウム)

ロブシャイトが作った新漢字は「行」の間に挟まれた漢字に従って発音する²⁵⁾。挿入する漢字の選択基準について、ロブシャイト自身は何も説明をしていないが、実例を見れば概ね、以下の2種類にまとめることができる。一つは、原語の構造分析に基づくものである。例えば「銜」、「銜」の原語にそれぞれ「水」と「天」の語根 (hydro, ura) がある。いま一つは、当該元素の外形上の様子や性質に基づくもので、「衡」、「衡」の「養」と「緑」はそれぞれ酸素の性質と塩素が気化した時の色を表している。但し原語の構造分析に基づくものは非常に少ないと指摘しておく必要がある。

ロブシャイトの試みは成功しなかった。他の宣教師たちに、実際の影響があったかどうか不明である²⁶⁾。

四、フライヤーの翻訳実践と訳語創出

19世紀に来華した西洋人の中で、西洋書の翻訳分野において最も大きな貢献をした者はイギリス人のフライヤー (John Fryer, 1839~1928, 中国名: 傅蘭雅) であった。1871年、フライヤーは最初の翻訳書となる『運規約指』、『化学鑑原』、『化学分原』、『防海新論』などを出版し、1880年までに翻訳した著作は70点近くに上り、翻訳中のものも十数種類あったという²⁷⁾。フライヤーはまた、1876年に上海に格致

24) ロブシャイトは「淡気」という訳語も使用している。

25) ロブシャイトは広東方言の発音は小文字で、官話の発音は大文字で同時に示した。「銜」「銜」には官話の発音は記されていない。

26) フライヤーは後述の1890年の文章でロブシャイトの字典の訳語を批評していることから、少なくともそれまではロブシャイトの字典を使用していたと思われる。詳細は後述。

27) 王揚宗『傅蘭雅與近代中国的科学啓蒙』、科学出版社、2000年。

書院（科学普及と図書販売）を開設し、『格致匯編』（1876～1892年に断続的に刊行）の出版等により、西洋の科学知識の紹介を積極的に推し進めた。フライヤーは1880年、*North China Herald*（『北華捷報』1880.1.29）紙に、西洋の読者に江南製造局翻訳館とその翻訳書の状況を紹介する文章を寄稿した。この文章の中でフライヤーは自分の翻訳経験に基づいて、西洋の言語を中国語に翻訳する際の問題や訳語の考案について論じた。文章が刊行された後、フライヤーは、英語で書いたため中国人は読むことができず、西洋人の益にしかならないのを遺憾に思い、よって労苦を厭わず中国語に訳出した（書為西文、華友不便披覽、若僅裨益西人而不公諸華友、殊属憾事、故不憚勞悴、灯下訳成（中文＝筆者））。中国語訳は『格致匯編』（1880年春から秋までの4号）に連載された²⁸⁾。1880年当時、この問題について、フライヤーが最も発言権を有していた人物と言えよう。

この「江南製造総局翻訳西書事略」と題された文章は、序文、第一章「源流」、第二章「翻訳の方法」、第三章「翻訳の有益性」、第四章「翻訳書の数と目録」からなっている。訳語創出の問題は、主に第二章で論じられている。第一章で、当時の西洋人は「中国の言葉や文字は西洋人にとって最も理解しにくく、理解したとしても西洋の書物の真髄を中国語に訳すのは困難だ」と思っていた。彼らは、「中国の文字は最も古く、最も馴染みにくく、最も柔軟性がない」、「中国は古くから宗教や政治を追求してきたので、西洋の宗教や政治の書物を翻訳するのは難しくない」が、西洋の科学技術の書を翻訳するのはまさに「笑い話」である。特に近年は、西洋の科学技術の発展は目覚ましく、「多くの分野に分かれ、術語も複雑になった。一方中国はそれに相当する学問も術語もなく、科学の書物を正確に訳出することは困難である。この困難は簡単に乗り越えられるものではない」と考えていた²⁹⁾。このような考え方に対して、フライヤーはまず「実際はそうではない。明代のマテオ・リッチらイエズス会士の人々や現在の翻訳者たちは、翻訳を止めざるを得ないほどの困難にぶつかっていない」と反論する。フライヤーは「西洋の学問や術語に相当するものがない」ことが翻訳の最大の障害となっている意見には同意し、「西洋書を翻訳する上で、何よりも重要なことは訳語である」と指摘している。フライヤーは同時に「中国の言語や文字は他国と同じく」、絶えず発展し、変化しており、外国の新しい文物や概念を受け入れる潜在的な可能性があると考えていた。彼は「近年、中国と外国の往来は年々増えており、新しい言葉も日増しに増加している」。「貿易や国際交流の中で現れた新しい概念や事物に対して、新しい訳語を考案して初めて表現することができる」。既存語の古い意味に拘り、「すべての訳語は中国古来の辞書の意味に従わなければならない」、別の解釈をしてはいけないのなら、翻訳は永遠にできないであろう」と述べている。翻訳者にとっ

西洋人もみな訳語創造の困難さを知っており、その方法を定めるべく長時間議論を重ねた結果、重要な方針として取りあえず次の三項目を取り決めた」と述べている。フライヤーらが決めた重要な方針とは以下の通りである。

一、中国語に既存の訳語がある場合：定めようとする訳語が、中国語に既に存在しているのに辞書に見つからない時、方法は二つある。(一) 中国ですでに刊行された科学技術の書物、或いはイエズス会士や最近来華したプロテスタントの宣教師らによる書物の内容を調べる。(二) 中国の行商人や、その術語を知っている製造業者、職工に問い合わせること。

二、新しく訳語を考案する場合：中国語に確かにその訳語がなければ、新しく作らなければならない。その方法は三通りある。(一) ふだん使う文字に偏旁をつけ加えて新しい訳語(字)を作り、新しい字の発音は元の漢字のままにする。例えば鎂(マグネシウム)、鉀(ヒ素)、砒(ホウ素)、矽(ケイ素)などである。或いは、字典にある非常用の漢字に新しい意味を与えて訳語にする。例えば鉑(プラチナ)、鉀(カリウム)、鈷(コバルト)、鋅(亜鉛)などである。(二) 数文字を使ってその物事を説明し、それを以って新しい訳語にする。字数は少ないほどよい。例えば氧氣(酸素)、輕氣(水素)、火輪船(汽船)、風雨表(晴雨計)などである。(三) 漢字で西洋の言葉を音訳する。その場合、主に官話の発音を使用すること。西洋言語の各音節にいつも同じ漢字を使うようにする。これまでの翻訳者が使い慣れたものはそれを踏襲することで、中国人は一目で西洋言語の訳語だと分かる。考案された訳語はどれも暫定的なもので、後に中国に既存の語があるか、定めた訳語が不適切と分かった場合はそれを改める。

三、中国語と外国語の訳語リストを作成する：翻訳の際に定めた新しい訳語は、物事の名称であれ、人名地名であれ、すべて随時に訳語リストに記録し、読者が原書を調べたり、西洋人に質問したりしやすいように刊行時に巻末に付ける。また各翻訳書に出てくる訳語をまとめて術語集にし、後の翻訳者に提供することにより、訳語の混乱を解消するのである。

重要な方針の一は、既存の訳語をできるだけ使用するということである。フライヤーはこれまでの蓄積として、イエズス会士の著述と墨海書館を中心とするプロテスタント宣教師の翻訳活動を挙げている。特にイエズス会士の文化的遺産への注目およびその利用については、アヘン戦争前の広州時代に比べて大きく進歩している。一方では、貿易の自由化や江南製造局の生産活動によって、「行商人や、その術語を知っている製造業者、職工」に専門用語を調査することも可能となった。但しこの場合、「訳語創出」と言えないケースが多いであろう。なぜならその多くは即物的に命名しただけで、外国語を仲介してい

なかったからである。広州時代にはこのような方法で作られ出された訳語も少なくない。それらの訳語は非常に低俗であるため、普及し定着する保証はない。

重要な方針の二は、訳語創出について論じた部分である。ここでフライヤーは三つの問題に言及している。一つは、造字による訳語の創出である。具体的に言えば化学元素の命名問題である。フライヤーは二つの方法を提案している。第一の方法は、常用の漢字を音符に使い、これに意味を表す偏旁（義符）をつけて新たに漢字を作る方法である。音符は原語の第一、または第二音節の発音に近い文字を選び、義符は物質の性質に基づいて選択される。フライヤーが示した例は「鎂、鉀、砒、矽」である。第二の方法は、「非常用の漢字に新しい意味を与えて訳語とする」方法である。つまり、すでに廃れた古い字を新しい訳語に改造することである。フライヤーが例として挙げた「鉛、鉀、鈷、鋅」はすべて中国の字典にある字である。例えば「鉀」は、甲冑の意味、「鋅」は堅い意味である。ここで議論されたのは、造字および文字使用の問題と言えよう。造字法は主として形声を利用した。つまり、音符は原語の発音を表し、義符は対象物の科学的分類を表す。例えば、「金」が金属を、「石」は非金属を表すという具合である³⁰。前述の通り、造字によって化学元素を命名する方法の提案者はロブシャイトであった。しかし、ロブシャイトの「五行法」は、新字が化学元素名であるということを示すだけで、分類学上の積極的な意味はない（すべての新字に「行」という文字が入っているため）。フライヤーの方法は物質形態を表すことができ、明らかに優れている。さらに重要なことは、字形が中国人に受け入れやすいものだという点である。フライヤーの造字法は、1869年に取りかかった『化学鑑原』の翻訳で初めて提唱された。ロブシャイトの影響を受けたかどうかは不明だが、協力者の徐寿起が重要な役割を果たしたことは疑いない事実である。二人が定めた命名法は以下の通りである。

西国質名字多音繁、翻譯華文不能尽叶、今惟以一字為原質之名、原質連書即為雜質之名、（中略）原質之名中華古昔已有者仍之、如金銀銅鉄鉛錫汞硫磷碳是也、（中略）昔人所譯而合宜者亦仍之、如養氣淡氣輕氣是也、（中略）此外尚有數十品、皆為從古所未知、或雖有其物而名闕如、而西書賅備無遺、譯其義殊難簡括、全譯其音苦於繁冗、今取羅馬文之首音、譯一華字、首音不合、則用次音、并加偏旁、以別其類、而讀仍本音³¹。

（西洋の元素名は文字や音節が多く中国語に訳しきれない。よって一字を元素の名称とし、また元素名をつなげて化合物の名称とする、（中略）元素名の中で中国に昔からあるものはそれに従う。例

中国名：丁韞良)の『格物入門』(1868)、カー(J. G. Kerr, 1824~1901, 中国名：嘉約翰)の『化学初階』(1871)の訳語より優れている。造字は「一字原則」の必然の結果であろう。なぜなら、廃れた古い漢字を見つけ出し、新しい訳語にするという方法は、「これまでに知られていない、またはものはあっても名称がない」といった新たに発見された元素を命名する問題を完全に解決することはできないからである。

第二の問題は複合語の創出である。中国語に意味区別の機能のある音節数は1500未満で、新語の創出は多音節の複合語に頼らざるを得ない。前述のように、訳語としての複合語は、直訳語と意識語に分けることができる。フライヤーが挙げた例語「養気、軽気、火輪船、風雨表」などから見て、意識が主体であることが分かる。当時の翻訳は、外国人が口述し、中国人が筆記するという方法を採用しており³³⁾、中国人は外国語を解さないため、外国人の口述は往々にして具体的、描写的にならざるを得ない。例えば、Oxygen、Hydrogenの日本語訳は「酸素」、「水素」と原語の語根を忠実に直訳したものである。対して中国語の「養気」、「軽気」は、現場性の強い、通俗的で分かりやすい意識となっている。「複数の文字を使ってその事物を説明し、それを以って新名称とする」というフライヤーの方法は、訳語がまさにこのような解釈の過程で誕生したことを物語っている。ただしフライヤーは、訳語は「字数が少ないほどよい(as few characters as possible)」とも指摘する。二音節は複合語の中で字数が最も少ないものである。現代中国語では三音節の複合語も増加したが、三音節を超えれば連語やフレーズになってしまい、実際に使用するには非常に不便である。前述のモリソンの辞典やホブソンの医学専門用語集の訳語は、このような問題を抱えている。

第三は音訳語についてである。フライヤーは、方言ではなく官話の発音を使用し、外国語の中でよく

32) 『化学鑑原』では一字原則は徹底されていない。気体は2音節の形態を維持している。蘇小楠の前掲論文を参照されたい。

33) フライヤーは本文において「至于館内譯書之法，必将所欲譯者西人先熟覽胸中，而書理已明，則與華士同譯。乃以西書之義，逐句說成華語，華士以筆述之。若有難言處，則與華士斟酌何法可明，若華士有不明處，則講明之。譯後華士將初稿改正潤色，令合於中国文法（館内の翻訳法は、まず西洋人が翻訳しようとするものを熟読し、内容を理解した上で中国人と共同に翻訳する。西洋書の意味を中国語で読み、中国人が筆記する。難しいところは中国人と相談する。中国人も分からないところは、詳細に説明する。下訳ができれば、中国人が中国語の文法に則するよう初稿を修正する）」(381頁)と指摘している。

使われる発音は同じ漢字で表記するようにと提案している。つまり表音に用いられる漢字を統一させるという問題である。この問題についてフライヤーは懐疑的な態度を示していると言える。彼は、「一目で西洋の名称だと分かる」ようにするため、音訳専用の漢字を定めるべきであり、定めた漢字にははっきりとした意味はなく、ただ発音表記としてのみに使用することに賛成し、「北京の宣教師らが共同で、西洋の人名地名等の訳語のために使用する漢字を定めようとする」試みに期待を寄せた。しかし、「定めた文字を新しい訳語だけに用い、既存の音訳語に適用しなければ大きな益にならない」と指摘している。制定された音訳専用の文字を既存の訳語に使用することができなければ、新旧訳語の統一は実現することができなかったからであろう。

重要な方針の三は、術語集の編纂問題である。これは単に後の翻訳者に便宜を図るためだけではなく、術語の体系的構築と統一に必要な作業でもある。この文章を発表後、フライヤーは『金石中西名目表』（1883）、『化学材料中西名目表』（1885）、『西薬大成薬品中西名目表』（1887）、『汽機中西名目表』（1890）を次々と出版する。『化学材料中西名目表』の巻頭序言に「同治九年、江南製造総局において化学鑑原、その続編、補編の翻訳を行う際に作成した」とあるように、長期間をかけて丁寧に準備したものである。フライヤーが編纂した一連の術語集は、江南製造局翻訳館の翻訳活動の総括であり、その後の術語創出のための基礎を作り上げた。

1880年代以降、教会系学校が大幅に増加し、西洋の自然科学知識を教える必要性から、科学技術用語の創出と選定が宣教師組織の重要な任務の一つとなった。1890年に第二回プロテスタント宣教師全国大会が上海で開催され、フライヤーはその席上、学術用語の問題に関する長編論文を読み上げた³⁴⁾。この論文は一、学術用語と中国語の関係、二、中国語学術用語体系の特徴、三、訳語混乱の現状とその原因、四、訳語混乱の解決方法——の四部分から成る。フライヤーは第二部分において、七つの方面から詳細に学術用語創出の原則と方法を論じている。フライヤーの主な論点は以下の通りである。

第一、できるだけ意味を訳し、音訳は行わない

フライヤーは、中国語は学術用語が少なく、外国語の言語成分への適応性が低いと考えていた。音訳によって新語を増やし、語彙を豊かにしている言語は世界中に数多く見られるが、中国語が同様の方法で外部世界の概念を吸収するのは困難である。ある言語が他の言語を吸収する能力は、両言語の類似度に比例する。中国語と西洋の言語の相異は大きく、独自の方法でゆっくりと吸収するしか方法がない。また、中国語には方言が数多く存在することも、音訳をより困難にしている。フライヤーは、実際状況

この節の標題はやや難解である。フライヤーは以下のように書いている。偏旁は漢字を構成する最も顕著な特徴の一つである。新しい学術用語は中国語のこの重要な特徴を軽視するべきではない。何千何万という漢字が、部首別にきちんと字典に配列され使用されるのを待っている。『康熙字典』に収録されている漢字は八万を超えているが（実際には49,030字余り）、特殊な状況を除けば実際に使用されているのは八千字足らずである。夥しい数の正統な漢字が化石化し、あいまいな意味しか持っていない。なぜ、このような漢字を発掘し、新しい意味を与えて訳語として使用しないのだろうか？このような試みは、鉀、鋅などの化学元素名を制定する際に行われたことがあり、中国人の受けも総じて良かった。これらの文字の長所は、字形と発音がすでに存在しており、かつ正当性があるということである。ただし、既存の漢字にはすべて意味があるか、或いはかつては意味を持っていた。例えば、coffeeの音訳に「加非」の文字を当てた場合も、この二つの常用漢字の字義を消し去ることはできない。「咖啡」のように口偏を加えることで、これらの文字はただ発音を表記しているだけで意味はないということを表示することもある。では、なぜすでに廃れた字「檳櫟」を使用しないのだろうか。この二文字は植物を表す木偏もあり、好都合ではないか。このようにした場合の唯一の欠点は、未来の文献学者が中国古典の中からこの二文字の当初の意味を見つけ出し、われわれの誤用を批判することである。或いはいつの日か保守的な愛国者が、この植物は古代の中国が原産で、まさに蒸気機関や電報のように、後に西洋に伝わったのだと詳細に論証する文章を書くかもしれない。そのような誤解の恐れがある場合は、適切な偏旁と音符とでまったく新しい、既存のどの字典にもない文字を作る方が良いのかもしれない。化学元素名の翻訳には造字法を用い、徐々に中国社会にも受け入れられている。造字法の最大の欠点は、こだわりのある中国の文化人がこういった正統的でない漢字に反対意見を唱えることである。

この章の内容から、いわゆる「できるだけ言語の基本構造と一致させるべき」というのは、主として漢字の分解可能性および偏旁の表意機能を指していることが分かる。フライヤーは、これらが中国語の基本的な構造上の特徴とまで考えており、できるだけ古い字を利用するか新しく字を創作し訳語とすべきだという結論を出した。

フライヤーの二つの文章は十年間の隔りがあるが、主張には一貫性がある。即ち、できるだけ外国語の意味を翻訳し、音訳を避ける。新しい訳語に古い、滅多に使用しない字を再利用するか、新たに文字を作るかで対処するということである。しかし、フライヤーと江南製造局翻訳館の訳語創出法には自ずから限界があったと言わざるを得ない。フライヤーは、音訳に反対し意味を訳出すべきと主張してい

たが、複合語の考案に十分な注意を払っていなかった。特に直訳（逐字訳）による訳語はほとんど見られない。これは日本の蘭学者の訳語創造の方法と好対照をなす。

造字による化学元素の命名は、後に化学物質の標準的な命名法として中国政府に採用された。フライヤーは成功したのである。しかし、この成功によって、新しい訳語の創出は、即ち新漢字の創造であるという間違った方向性が示された。造字法は、特に博医会に高く評価され、医学用語体系の構築に最良の方法と考えられ、極限まで推し進められた。その結果、医学、なかんずく解剖学の術語選定は袋小路に入り込むこととなった。

五、博医会の医学用語制定

医学の知識は西洋学の重要な分野の一つである。宣教師らは来華当初から、伝道に医学を利用する方法を取り入れた。1886年には、中国における西洋医学教育と関連知識の普及を旨として、博医会（China Medical Missionary Association）が設立された。医学用語の考案、選定も日程に上った。同会の主なメンバー、コーズランド（Philip B. Cousland, 中国名：高似蘭）は医学伝道と医学用語の整備について次のように振り返る³⁶⁾。

1850～1858 中国語の医学用語創出に、最初に取り組んだのは広州の宣教医、ホブソン（B. Hobson, 1816～1873, 中国名：合信）であった。この期間、ホブソンは数種類の西洋医学入門書や教科書、英漢対訳術語集を出版した³⁷⁾。

1871～1890 ホブソンに続いて、広州のカー（J. G. Kerr, 1824～1901, 中国名：嘉約翰）医師が、中国の医学事業に30年余りにわたって貢献する。1871～1898年の間、カーは、数多くの医学著作を出版し、医学用語の創出においても多くの功績を立てた³⁸⁾。また福州のオスグッド（D. W. Osgood, 中国名：柯為良）医師、ホイットニー（H. T. Whitney, 中国名：惠亨特）医師、北京のダジョン（J. H. Dudgeon, 1837～1901, 中国名：徳貞）医師らは、解剖学、生物学分野において、漢口のスミス（Porter Smith, 中国名：施維善）医師は薬物学分野において、山東のハンター（S. A. Hunter, 中国名：洪士提反）医師は診断学、製薬学分野においてそれぞれ貢献した。上海のフライヤー、広州のトムソン（J. C. Thomson, 中国名：桑普生）も医学の各分野の用語集を完成させた。

1890 翻訳者によって医学用語が異なり、統一されていないことが中国における西洋医学教育に悪影

に修訂を加えた。同年、博医会第二回全国大会が開催され、標準学術用語を使用する医学教科書シリーズを出版することを決定した。

1908 学術用語委員会が選定した医学用語を収録した *An English-Chinese lexicon of medical terms*, Compiled for the Terminology Committee が出版された。コースランドの編纂によるものである。

博医会の学術用語委員会が1901年に出版した第1次報告書の序文において、訳語創出の原則について以下のように説明している。

博医会のメンバーに訳語創出の原則について説明することは恐らく有益であろう。まず注意すべき第一の問題は、骨の名称である。術語の体系的構造から考えて最も理想的な方法は、それぞれの骨に可能な限り単音節の漢字名称を与えることである。動脈、静脈、神経、筋肉の名称もそのようにすべきである。

適切な漢字を探すため、委員会はウィリアムズ (S. W. Williams, 1812~1884, 中国名: 衛三畏)、ジャイルス (H. A. Giles, 1845~1935, 中国名: 翟理斯) の漢英辞典および『康熙字典』を徹底的に調査し、以下の原則を定めた。長い骨または重要な骨については、文字に骨偏を加える。手の骨には手偏を、脚部、足の骨には足偏を加える。ただし、頭骨には特別な偏旁は加えない。なぜなら顔骨(頭骨)などには、すでに頭部をあらわす偏旁があるからである。

具体的な方法としては、廃れた古い漢字を利用するか、または常用の漢字に偏旁を加え、『康熙字典』にない新しい意味を与える。このような命名システムは学生や教師が、骨が身体のどの位置にあるのかを覚える際に非常に有用である。

血液循環系統の各部分の命名原則は、血偏を加え、各部位を漢字一文字で表すことである。例えば、

異文化受容における漢字の射程（沈）

原語	漢字	発音	命名の根拠	現代訳語
Auricle	竇	<i>Hsüeh</i>	a blood cave	心房
Ventricle	竇	<i>P'en</i>	blood spurter	心室
Artery	脈	<i>Mo</i>		動脈
Vein	盂	<i>Huang</i>	blood going to the heart	静脈
Capillary	盤	<i>Wei</i>	minute blood vessels	毛細管

上記の表のうち、竇、盤は新造字であるが、その他は『康熙字典』に収録されている古い漢字に、新しい解剖学の意味を与えたものである。その他に以下のような例もある。

CanalやDuctなど管状の器官は「膾」で表わす。

Cellは「朥 (*Chu*)」で表す³⁹⁾。

Glandの訳語について、学術用語委員会は日本語の「腺」（発音は*Chüan*）を用いてflesh springを表す方法は正しいと指摘していた。しかしまた、管のないglandについて、「櫛 (*Hu*) = 核」を使用することも提案していた。

序文の中では、以下の術語の命名（造字）理由についても説明されている。

pancreas	膵 <i>I</i> (膵臓)	albumin	朧 (アルブミン)
Lymph	盪 <i>Chin</i> (リンパ)	proteids	脛 <i>Ch'eng</i> (たんぱく質)
globulin	朥 <i>Ching</i> (グロブリン)	Serum	盟 <i>Ming</i> (血清)
Tissue	朥 <i>Wang</i> (組織)	Uterus	宮 <i>Kung</i> (子宮)

第1次報告書に示されている造字原則は博医会のもその後の学術用語選定作業においても遵守された。*An English-Chinese lexicon of medical terms*, 1908の序文で、コースランドは学術用語委員会の訳語作成の原則を整理し、巻頭に置いた。具体的な内容は以下の通り。

一、中国の訳語を使用する：無論、多くの場合そのような訳語は存在しないか、存在しても医学用語

う⁴⁰⁾。

1937年に『高氏医学辞匯』（増訂第8版）が出版されたが、造字の方法で作られた訳語は殆ど排除された。これに取って代わったのが日本製の医学用語である。博医会学術用語委員会の努力は、基本的には失敗に終わったと言えるだろう。博医会の作った新漢字は、なぜフライヤーの化学元素名と異なる結果になったのだろうか。まず考えられるのは、フライヤーの新漢字は主として「形声」、即ち「外国語の最初の音節を漢字一字で音訳する。最初の音節が不適切であれば次の音節を音訳する。また偏旁をつけ加え物質の種類を区別し、発音は元の漢字に従う」という方法で作られた。これに対し、博医会の新漢字には「会意」的要素がより多く含まれており、外国語の語源的意味を新漢字に詰め込もうとした。第二に、そして最も重要なことであるが、博医会の「一字原則」は、中国語の発展方向を無視したもので、誤ったものである⁴¹⁾。例えば、子宮、蛋白、血清などは一字の訳語に改められた結果、「宮」、「明」と同音異義語となり、口頭言語では区別ができなくなった。

六、結論

益智書会主席のマティーア（C. W. Mateer, 1836~1908, 中国名：狄考文）は1904年、学術用語辞書 *Technical Terms* を出版した。この辞書は、来華宣教師たちの100年に及ぶ学術用語創出の集大成と言わべきものである。マティーアは序文で、「正確な学術用語は科学的思考や研究に不可欠である。中国において西洋の科学教育を成功させるには、十分かつ正確な学術用語が絶対に必要である。しかし、最も早く中国の読者に物理、化学を紹介する書物を書いた一部の作者は、できるだけ新しい学術用語を避ける傾向にあった。その結果、科学記述の正確性が損なわれ、科学の正しい発展も悪影響を受けている」と指摘している。また訳語の創作について、マティーアは以下のように述べている。

40) ただしコーズランドは、自分たち自身はこの方法を利用する資格はないと考えていた。

41) 複合語の語源的意味は個々の構成成分に求めることができる。これらの成分は音声形式を持つ。つまり音声によって支えられている。しかし、漢字構成要素としての偏旁や部首は音声形式を持っていない。従って、語源的意味が認識されたとしても視覚的なもので、言語の本質である音声次元のものではない。

異文化受容における漢字の射程（沈）

一般によく提起されるのは、学術用語は意識されるべきかそれとも音訳されるべきかという問題である。簡潔にして適切な訳語が見つければ、答えは明らかであろう。中国の学者はふつうこのような訳語を好む。ただし、冗長で低俗な訳語や、意味があいまいな訳語の場合、西洋の言語をそのまま音訳した方が良いように思われる。この方法は商人の間では比較的流行している。この用語集には、総体的にみればごく僅かではあるが、多くの音訳語が収められている。（中略）

読者はおそらく、この用語集には中国の字書にない新漢字が数多く含まれていることに気づくであろう。それらの漢字はみな、偏旁と音符を組み合わせて作られており、読み方は音符に従う。全ての化学の基本元素とよく見られる物質名はみなこの方法で命名された。この方法はまた、単音節漢字の訳語を早急に必要とする学術用語にも用いられた。造字法は語彙を豊かにすると同時に、訳語の混乱も避けることができる。この方法はこれまでと比べれば、今後さらに多く採用されるであろうとわれわれは大胆に予測している。

Technical Terms の造字による訳語は主に医学、化学の分野に見られる。今となって振り返ってみれば、マティーアの「大胆な予測」は、現実のものとはならなかった。序文においてマティーアは、*Technical Terms* の編纂作業の大部分は妻が行ったと述べている。しかし10年後の1913年、マティーア夫人は *New Terms for New Ideas* を世に送った際、その序文で以下のように書いている。

新概念を表すために新たに漢字を作り出す人もあるが、しかしこの方法の欠点は発音が確定しにくいことである。本書では、microbe の訳語として種の一語のみ採用した。造字法は普及が難しく、中国人自身が創出した新語の方が東洋の特色がよりよく表れている。

新造字や廃れた古い漢字を訳語にする方法について、中国の知識人や翻訳家もそれぞれ意見を述べている。宣教師らの造字法に最も早く反応したのは梁啓超である。梁啓超は以下のように述べている。

古人造一字以名之者，今其物既已無存，則其字亦為無用，其今有之物，既無其字，則不得不借古有之字而強名之，此假借之例所以孳乳益多也，（中略）新出之事物日多，豈能悉假古字？故為今之計，必以造新字為第一義。近譯諸名，如汽字之類，假借字也。如六十四原質、鉍、鉀等之類，造

中で、「4000年前に誕生した漢字は中国中古以来の事物や学問を記録するのも、すでに事足りなくなっている。西洋の各分野の学問についてはなおさらである」と指摘し、古代漢字の意味はいまの中国の事物でさえ、その意味範囲は「すでに完全に相容れない」のに、西洋の文字に対応しきれないのはいうまでもない。黄遵憲は、「今はすでに20世紀の世界で、東西の文明は接近している。書物の翻訳は、互いの考えを通じさせ、新旧の学問を解き明かす、実に要務である」と述べている⁴³⁾。訳語の創出について、黄遵憲は具体的に、造字、仮借、附会、諛語、還音、両合などの方法を列挙して説明している。

黄遵憲も梁啓超と同じく造字、即ち漢字を作って新語にする方法を第一に挙げており、最も確実な方法と考えていた。黄遵憲は中国の読書人は、造字を「古代の聖人賢者が独断専行の事柄」と考えているようだが、しかし、『倉頡』には三千余りの漢字しかなかった。『集韻』、『広韻』に至って四、五万字に増加した。それらは皆、後世に「事物に合わせて作られた」ものである。例えば「僧、塔」などを、文章家は十三経の中の文字として使用しているようだが、実際は仏教の経典を翻訳するために作られた文字で「晋や魏以前、これらの字はなかった」。黄遵憲はさらに、荀子が言うように、新語が言語社会に受け入れられるには時間が必要で、一般に理解されない語についてはその意味を説明し、場合によっては用法を弁別しなければならない。黄氏は造字法で作られた新語（新漢字）だけが迅速に社会に受け入れられると指摘している（荀子又言、「命不喻而後期、期而不喻然後説、説不喻然後辨」吾以為欲命之而喻，誠莫如造新字）。しかし、黄遵憲はどのように新漢字を作るかについては触れていない。

一方、頑なに国粹を堅持し、新名詞を排斥しようとする中で知られている張之洞も「化学家製造家及一切専門之学、考有新物新法、因創新字（化学者や工芸家及びすべての学術分野では新しい発明や技術が考案され、その為新しい字を作る）」という場合に限って新造字に賛同している⁴⁴⁾。

それに対して、嚴復は宣教師らの方法については意見を留保している。確かに嚴復は初期の著述においては古い僻字を大量に使用しているが、1909～1910年に清学部審定名詞館で科学技術用語の選定を行った際、古い字の使用に制限を設けた。選定された訳語のうち『康熙字典』の僻字を使用した語は、

43) 王栻主編『嚴復集』第5冊、中華書局、1986年、1571～1573頁。

44) 張百熙、榮慶、張之洞、「学務綱要」、1903年9月、舒新城編『近代中国教育史料』、上海中華書局印行、1928年、8～30頁より引用。

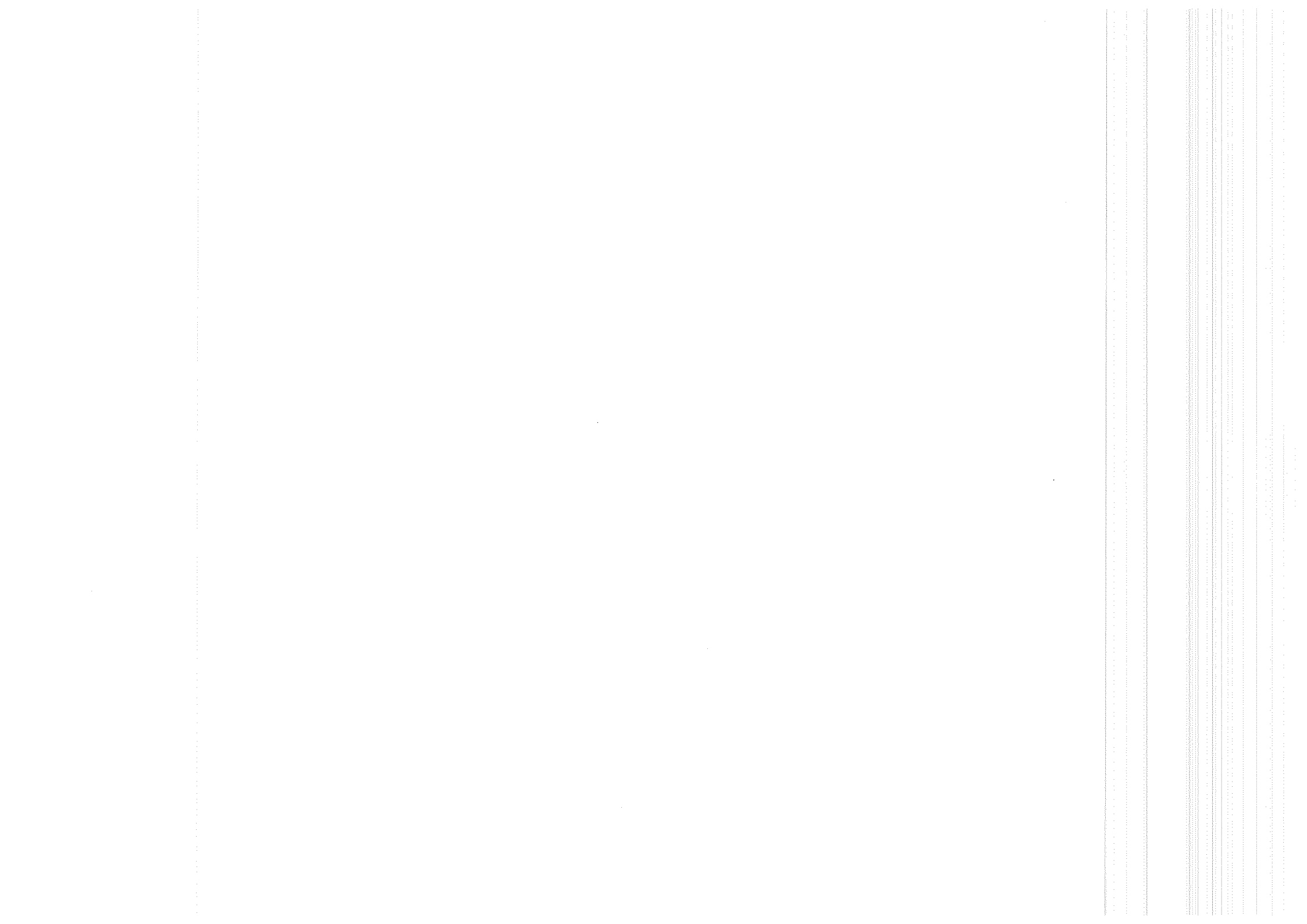
Lymphの訳語である「盪」など数例しか見られない⁴⁵⁾。造字については、嚴復やその他中国の翻訳家らは黄遵憲が言うところの「古代の聖人を非難し、法律を無視する罪」に陥る危険を冒したくないように見受けられる。また、古い字の使用について、胡以魯は、

故有之名。国人誤用訳者亦宜削去更定。誤用者雖必廢棄語。第文物修明之後復見用則又殺惑矣。是宜改作者。例如鎊銻本火齊珠也。今借銻以訳金類元素之名。汽本水涸也。今借汽以訳蒸氣之名則不可。

（古い名称について、中国人はかつての意味を消し、新しい意味を与えて訳語にしている。使用された語は廃れた語ではあるが、文物が隆盛を取り戻し、（その名称が）再び使用されれば、混乱が生じる恐れがあり、改めなければならない。例えば鎊銻は本来、火齊珠という意味だったが、現在は金属元素の名称に使用されており、汽は本来水が枯れる意味だったが、今は蒸氣の名称となっているのは適切ではない）

と指摘している。つまり、「銻」はもともと火の珠を指し、「汽」は水が枯れることを指したもので、それを金属元素や水蒸氣の意味に使うのは不適切である。なぜなら、今は廃れた字とはいえ、いずれ国運が上向き、文物が隆盛を取り戻し、（その名称が）再び使用された際、誤解が生じるからである。胡以魯はフライヤーの、廃れた漢字を利用し、化学元素の訳語にする方法には反対していた⁴⁶⁾。胡以魯はまた「新事物之名称及表彰新思想之語詞、免用複合語詞為之、不須作新字（新事物、新思想を表す語句はできるだけ複合語を使い、新しく漢字を作る必要はない）」とも述べている⁴⁷⁾。

前述のように、漢字の歴史は絶えず増殖し続ける歴史であり、「六書」の原理は西洋人には魅力的に映ったようである。しかし黄遵憲が指摘しているように、中国の士子にとって造字は「古代の聖人賢者の独断専行の事柄」であった。また語彙学の見地から見れば、近代以降の中国語の新語は複合語方式でしか増やすことはできず、新たな語根創造はもはや繰り返せない歴史となった。限られた音声形式に対し、言語を記録する符号を増やすだけでは学術用語の体系的構築は成功する見込みはない。これが、宣教師が我々に残してくれた教訓である。



アジア文化交流研究
第 5 号

発行日 2010年2月10日

編集 関西大学アジア文化交流研究センター
センター長 松浦 章

発行 ©関西大学アジア文化交流研究センター
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

印刷 株式会社 遊文舎